

Medicine 医学を変えた 70 の発見

William Bynum, Helen Bynum (編) 鈴木晃仁, 鈴木実佳 (訳)

10 年以上前から医学部 1 年生と一緒に医学史を学んでいる。24 のテーマを私が設定してそれを学生が調べ、1 回 2 テーマずつをパワーポイントにまとめて、1 テーマにつき質疑応答を含めて 45 分間で発表する授業形式をとっている。学生たちは医学に関すること初めて触れる機会なので、皆、目を輝かせて発表を聴いている。開講当初は、数少ない医学史の本を探したり、関連書籍を図書館で借りたりしながら学生たちは課題をこなしていたが、最近ではもっぱらインターネットで探しているようだ。確かにカビ臭く小さな活字の漢字だらけの参考書籍は敬遠しがちになろう。そのため豊富な画像をカラーで掲載している書籍を待ち望んでいたところであるが、最近そのような要望に応じてくれる書籍が出版された。それが、『Medicine——医学を変えた 70 の発見』である。

これまでの医学史の本は、時系列にそった記述に終始しがちであったが、本書は、古代の医学（エジプト、中国、インドなど）における身体のとらえ方から、現代の最新医療までを医療機器、疫病、薬、外科技術、予防など 7 つの章（70 項目）に分けてわかりやすく解説している。特徴は切り口が斬新なことである。その理由は、医学の長い歴史を、単に時系列によるのではなく、その多様なテーマを上手に 7 つに分けて、テーマごとに一連の流れを作って描き出しているからである。それゆえ読者は、本書を読むことで 7 つの視点で 7 回医学の歴史を振り返ることができる。そして、何よりも幅広い時代・地域から集められた豊富な図版が 382 点もオールカラーで掲載されているのがうれしい。原書は美術書のように分厚くて重かったが、翻訳版の本書は薄い紙を使って表紙もソフトカバーになり、携帯しやすくなっている。

ここで内容をいくつか紹介してみよう。第 1 章は

「身体の見え方」である。エジプト医学、中国医学、インド医学、イスラム医学の歴史や概念がそれらを象徴する貴重な図版とともに述べられている。「ヒポクラテスの伝統」では、体液と精気という 4 体液説の概念を解説し、古代のギリシャからガレノス主義への道程を、そして現代医学へどうつながるかを考察している。そして、解剖学、病理解剖学、細胞理論、ニューロン理論、分子という項目を設けて一気に現在にまで駆け上ってゆく。

「商売道具」と冠した第 3 章はユニークである。聴診器、顕微鏡、皮下注射、体温計、X 線、血圧計、除細動器、レーザー、内視鏡などの開発の歴史が述べられている。そこでは、最初の体温計、指輪を付けたキューリー夫人の手の X 線像などの貴重な図版に触れることができる。

最終章は「医学の勝利」である。ワクチン、ビタミン、インスリン、ヘリコバクター・ピロリなどの項目がある。インスリン療法を受ける前と後の 1 型糖尿病の少女の同一人物とは思えないほど変化した写真をみると、「医学の勝利」という言葉も頷ける。

本書は、どの項目も図版を含めて見開き 2 ページまたは 4 ページに収まっているので、1 項目であれば短時間で読むことができる。学生たちの医学史の資料としてのみならず、医師や一般の方々が就寝前などのちょっとした時間に読むのにもうってつけである。ぜひ、一読を薦めたい。

札幌医科大学教授・地域医療総合医学
山本和利

A4 変 頁 304 2012 年

定価 4,200 円（本体 4,000 円＋税 5%）

[ISBN978-4-260-01518-9] 医学書院刊